標本は語る　【第 4 回】

学校に眠る雑草標本

ふじのくに地球環境ミュージアム　准教授
早川　宗志

小・中・高校などの学校教育施設には自然史標本が所蔵されていることがある。学校玄関や応接室のショーケース，“開かずの間”状態の理科室・生物室の戸棚の中にひっそりと置かれているタヌキの剥製や岩石の標本（図 -1）を見たことがあるだろうか？　これらの学校標本は，何のために，どういった経緯で置かれ，どのように学校教育に利活用されてきたのだろうか？　実は，学校標本には雑草のさく葉標本が含まれていることがある。このことは，戦前・戦後の学校教育において雑草の実物標本を用いた授業が行われてきたことを示している。かつての博物教育においてどのような雑草標本が利活用されてきたのか，紹介したい。

かつての小学校や旧制中学校における自然科学分野の教科では，「博物」の学科が課されていた。この時代の博物教育は，実物重視の教育の下で，生徒との問答を通じて理解を深めるために標本・模型・図などを用いた授業の形式が採用されていた（板倉 2009）。そのため全国の学校では，動植物や鉱物の標本・図・模型・実験機器・装置類などが必要となった。そこで学校には学校教材の販売業者から購入した標本（教材業者標本）と，教師や生徒が地元の資源を収集した標本（教師・生徒作製標本）とが揃えられていった（早川ら 2023a, b）。

学校教材の教材業者には，島津製作所標本部，山越工作所，上野科学社など様々な業者があり，ニワトリやカエルなどの身近な生物から，カメレオン，ハリネズミなどの異国の生物まで，多種多様な種類が取り揃えられていた（図 -2，早川・長橋 2003）。

本稿で紹介する事例は，島津製作所標本部が大正時代に作製したさく葉標本の「有用植物」「繊維植物」である。1915–1924（大正 4–13）年にかけて標本が作製された「有用植物」には，イネ，ナス，カラシナ，ミカンといった穀物，野菜，果樹など 92 点が含まれていた（本来は 1 セット 100 点）。この中には，イチビ，ヨモギ，ジュズダマ（図 -3）など，現在では有用植物としてはあまり積極的には利用されておらず，むしろ雑草として防除されることが多い植物も含まれていた。次に，1914–1926（大正 3–15）年にかけて作製された「繊維植物」には，ヒメガマ，イグサ，フトイ，ケナシチガヤ，メガルガヤ，クズなど 30 点が含まれていた。カサスゲ，シチトウイ，シュロ，ワタなど，「有用植物」と「繊維植物」の 2 セットに重複して含まれる種類もあった。

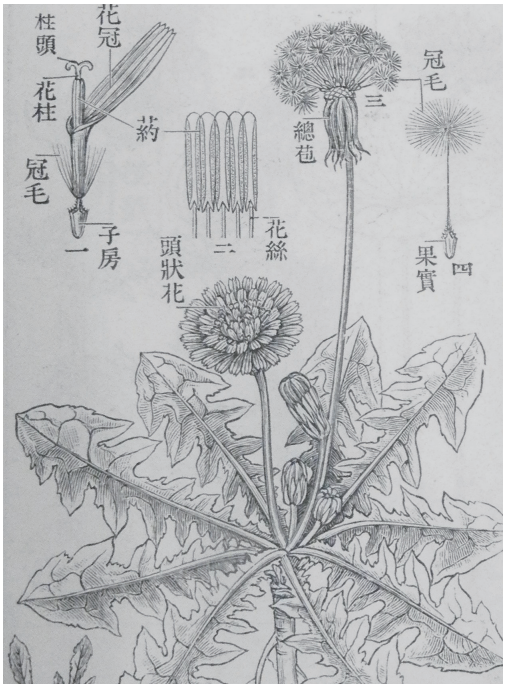
これらの標本ラベルの科名は，禾本（イネ）科，莎草

図–1　静岡県立清水東高等学校の旧校舎の生物室

図–2　静岡県立富士宮北高等学校旧蔵のカメレオン（亜佛利加産，東京器機標本株式会社）とハリネズミの剥製標本

図–3　島津製作所標本部が作成したタウムギ（ジュズダマ）の標本

図–4　シチタウ（シチトウイ）の標本ラベル（大正 12 年 11 月 4 日，東京（栽培）産，島津製作所標本部）

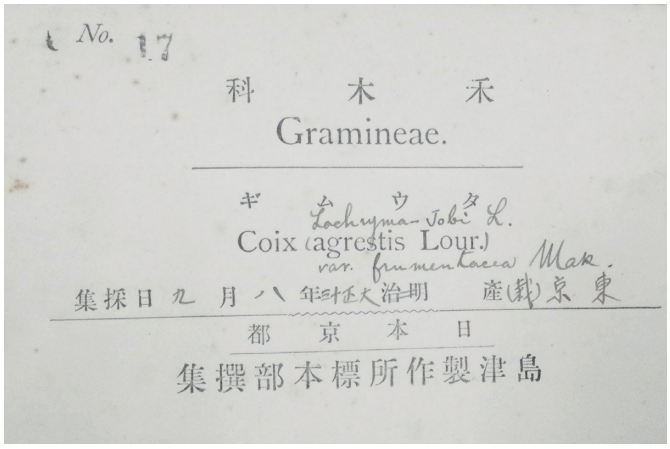


図–6　新制女子植物教科書（東京開成館，1924（大正 13）年）におけるたんぽぽの挿絵

（カヤツリグサ）科，燈心草（イグサ）科，香蒲（ガマ）科など漢字で書かれており，カタカナ表記する現在とは異なっていた（図 -4）。また，標本ラベルの和名も，タウムギ（ジュズダマ;図 -5），サンカク井（サンカクイ），アヲツヅラフヂ（アオツヅラフジ）など，現在とは和名（一般名）の表記の仕方が異なっていた。

紙面の都合上，今回は紹介しきれなかったが，この他にも戦前から戦後にかけて，様々なセットのさく葉標本が教材業者標本として販売されていた。教材業者標本は，分布の限られる希少な植物や，現在では失われた産地の植物も含まれていることから，生物多様性情報の観点から重要な標本であったことが伺える。

さて，気になるのは，これらの雑草標本がどのように授業



図–5　タウムギ（ジュズダマ）の標本ラベル（大正 13 年 8 月 9 日，東京（栽培）産，島津製作所標本部）。図 -3 と同一標本

で活用されていたのかである。詳細情報を持ち合わせていないが，当時の植物教科書（柴田 1924）を見てみるとたんぽぽなどの挿絵が掲載されていた（図 -6）。雑草にあたる植物種の掲載は少しであるが，教科書を補完する教材として身近な雑草の標本を見て学ぶ時間がとられていただろうことは想像にかたくない。

読者の皆さんが通った学校にも，このような雑草標本が人知れず眠っていたのかもしれない。しかし，現在では学習指導要領から外れてしまう過去の標本資料は，校舎の建て替えなどの際に捨てられてしまう運命にあるのが一般的である。果たして，学校に眠る雑草標本は“宝の山”となりうるのか，それとも“忘れ去られたゴミ”となるのか。雑草標本から読み取れる情報や秘められたストーリーが“宝の山”に化けるものだと信じて研究を始めてみたところである。

謝　辞

標本の移管・寄贈や調査にご協力いただいた静岡県内の高校の教員，実習助手ならびに生物部の生徒に感謝いたします。本研究の一部は，JSPS 科研費 23K00967 の助成を受けた。

参考文献

早川宗志・黒沢高秀・杉野孝雄・橋越清一・岡田努・斎木健一 2023a．清水東高等学校から見いだされた学校教材として販売されたさく葉標本．植物地理・分類研究 71：34–43．
早川宗志・杉野孝雄・橋越清一・岡田努・黒沢高秀・斎木健一 2023b．清水東高等学校に所蔵されていた教員や生徒により作製されたさく葉標本．東海自然誌（16）：1–6．
早川宗志・長橋綾香 2023．学校標本：学校に標本があるのはなぜか？．理科教室 66：70–72．
板倉聖宣 2009．増補日本理科教育史．仮説社，東京．581p．
柴田桂太 1924．新制女子植物教科書．東京開成館，東京．